

報告に対するコメント

兵頭 淳史



ご紹介いただきました専修大学の兵頭です。本日はよろしくお願ひいたします。最初にお断りしておきたいのですが、これからの私の発言には今日の報告者を含めて人名がいくつか出てまいります。ご存命の方のお名前については「さん」づけで統一し、故人に関しましては、歴史的な人物ということで、原則として敬称を省略させていただきたいと思ひます。

ところで私は三池争議や向坂逸郎そのものを研究対象としているわけではありませぬし、業績や力量という面でも、どう考えてもコメンテーターとして適任ではないと思われるわけですが、何故ご指名が下ったのかということを考えてみるに、おそらくその理由は、交通費が地下鉄の電車賃ぐらいで済む労働運動史研究者の中では、珍しく九州大学の出身であるということではないかと想像します（笑）。

私はもう九大を離れて東京に来てから10年ぐらいたつのですが、分野が若干違う同僚や研究者などに出身校を聞かれて「九州大学です」というと「ああ、あの向坂逸郎のいた、マル経が強い」というようなことを言われることが、今でもちょくちょくあります（笑）。しかし私が九大に入学したのは向坂の退官から30年近く後の80年代後半で、もうその頃には大学の中に向坂の影を見ることはあまりありませんでしたし、マルクス経済学が強いかと言えばそれもそんなことはなく、ご多分に漏れず非常に弱くなっていましたから、全然そういうイメージと実態とは違っていました。

しかし、それでも九州大学と言えばどうしても「向坂逸郎」というイメージはかなりつきまっていたようです。個人的なことをさらに申し上げれば、私はもともと九州に縁がある人間ではなく、関西で生まれ育ったのですが、高校3年生のときに「九大に行きたい」と父親に言ったところ、当時管理職として組合と厳しく対峙していた父は、「お前、あの向坂逸郎の九州大学へ行くのか。学生運動なんか首つっこむんじゃないぞ」と釘をさしたものです（笑）。それでも父は、私も保守的な人間だと思っていて信頼していたのかもしれませんが、そんなことを言いながらも九大の受験をあっさり認めましたし、そもそもその言い方にしても半ば冗談といった感じだったのです。しかし私は父の期待に反してお調子者だったようで、入学するなり、まだその頃には少しだけ残り火の

1968年大阪生まれ。九州大学法学部卒・同博士課程単位取得、九州大学助手などを経て、現在、専修大学経済学部教授・法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員。著書『新自由主義批判の再構築』法律文化社、2010年（共著）他、論文「企業内労働組合体制の成立—高度成長期における労働組合と労使関係の変容」『地域と労働運動』第124号、2011年、他。

ように存在していた学生運動に片足を突っ込むことになり、学費値上げ反対だの天皇弔意強制反対だのなんのなんのと、ろくすっぽ授業には出ず、おまけに4年生になって卒業の年になったら、「就職はしないで労働運動の研究でもしようと思う」などと言い出したものですから、父は苦々しげに「お前を九大なんかに行かせたのは本当に失敗だった」と言ったものです（笑）。父にしてみれば、息子は九大なんかに行って、向坂の「亡霊」に取りつかれてしまったとでも感じたのでしょう。

でも実は、80年代の九大の学生運動の中には向坂派の影響はほぼ皆無でしたし、先ほども言いましたようにマル経の存在感さえ小さくなっていたその頃の九大で過ごした学生時代に、向坂逸郎という人物について意識することさえほとんど無かったと言っているかもしれません。しかし、九大の学部を卒業してから10年近くが過ぎ、九大を去る頃になって、実は向坂の「影」に触れる機会がようやくやってきて、そのことは今でもたいへん印象に残っています。そのことについてはまた後ほどふれますが、今日こういうところでお話しさせていただく機会をいただいたのも、向坂との何か不思議な縁なのかも思ったりしています。

それはさておき、いま平井さん、石河さんの順にご報告いただきましたので、その順番で、それぞれのご報告に関して手短かにコメントさせていただきたいと思います。

まず平井さんのご報告についてなのですが、その前に、私がかつて福岡県の大学にいて、しかも労働運動史の研究をしているのに、なぜ三池争議を主要テーマとして取り組もうとしなかったのか、とご不審に思われる方もいらっしゃるかもしれません。実は、私も研究者として駆け出しの大学院生の頃には、「三池争議なんかも面白そうだね」と軽い気持ちで考えてしまったこともありましたが、そこで、平井さんの著書『三池争議』のもとになった初出の論文を読んでしまったわけですが、それでもう血の気が引いてしまいました。渉猟された資料の豊富さ、実証の丹念さ、そして発掘された歴史的事実を整理してゆく理論的なシャープさにしても、こんな凄まじい水準の研究がなされているようでは、これはもう常人の分け入ることができるような分野・対象ではない、と打ちのめされたわけです。そういうことで、私はこんな恐ろしいところには足を踏み入れるのはやめようということで、情けないことですが、早々に手を引いてしまったのです。

余計な話になりましたが、ともかく、その後発表されたものも合わせて単著にまとめられた平井さんのご研究は、三池争議研究におけるまさに「金字塔」と言うにふさわしいものです。先ほどのご報告ではその研究の核心部分が平井さんご自身によって簡潔に語られたわけですが、そこで改めてわかるのは、平井さんの研究では、三池争議が分析されるにあたって、その前史が非常に丹念に分析されているということです。つまり、「到達闘争」やさらにその前段階にまで遡り、職場闘争の積み重ねがなぜ三池争議にまで至ったのかということ、緻密に論証されたわけです。そのことによって、この争議において三池の労働者がいったい何を守ろうとしていたのか、逆に言えば経営側は何を攻撃していたのか、そういうことを、平井さんのご研究は非常に深いレベルからえぐりだしています。それが「労働者的職場秩序」であり、その核の一つであったのが「輪番制」、つまり担当する作業が毎日順番に変わっていくシステムだったわけですね。これによって、三池労組は賃金においても労働負担においても経営側や職制の恣意や労働者間競争を排した平等な職場秩序を維持していこうとした。

これに関して、平井さんは先ほど、輪番制のようなシステムは本来会社がやって当然のものなの

だ、という趣旨の発言をなさったのですが、私はそこについては若干違う感じをもちます。つまり、輪番制のようなシステムは、会社は当然やらないであろう、というよりむしろ会社はそれを攻撃して当然であろうと私は考えるわけです。会社の論理としては、平等な賃金を保障する輪番制に代えて、賃金差別によって競争を促進するようなシステムにするのが当然ではないか、むしろ、そこが問われていたと思うのです。そしてこれは今日的な含意という点でたいへん重要なのではないかと私は思います。

つまりよく知られているように、近年における、「年功賃金」から「成果主義」へ、という賃金制度改革の流れの中で、職務と労働者とを一对一で厳密に対応させて賃金額を決めてゆくという賃金管理が、「成果主義」化の一環として導入される動きがあるわけです。しかし、このとき三池の労働者が守ろうとしたのは、そういった制度とは全く異なるシステムだったわけです。どの人がどの職務に就くかは、その時々によって違う、皆それを平等に回していくという形で、むしろ職務と人との固定的な関係を切断し、その関係が柔軟性であることを前提としつつ自分たちのコントロールのもとに置こうとした。そのことは今日の労務管理・労使関係のあり方を考える上でも非常に示唆的だと言えるのではないのでしょうか。つまりこの問題は、たとえば冒頭での五十嵐さんの発言にもあった捉え方、すなわち、「日本的雇用慣行」は、中でもとりわけ長期安定雇用などの要素は、少なくともある程度は三池争議の遺産として形成され守られてきたものなのだが、それが現在資本によって攻撃され揺らいでいる、という見方をめぐる問題にも関連するかと思えます。つまり今日、日本的雇用慣行に対して、それは労働者を強固に支配し分断する道具であって、労働者によって批判され解体されるべきものだという議論もあるわけです。それに対して、たとえば三池労組が追求した輪番制が、一人の労働者と単一の職務との固定的な関係を否定することを通じて賃金の平等性・公正性を確保しようとしたことに見られるように、日本的雇用慣行は、三池労組のように戦闘的な労働組合運動によって追求されたような、積極的な要素をも含む側面をもつとも言えるのではないか、平井さんの三池争議研究はそういう問題提起につながるとも読めるのですが、このあたりをどのようにお考えになっているのかについてお聞きしたいと思います。

さて、石河さんのご報告についてです。こちら私にとって非常に刺激的な報告でありました。「向坂逸郎と三池争議」というテーマにまとわりつく通俗的なイメージとして、向坂は三池を「社会主義革命の実験場」あるいは「社会主義革命が起こりつつある場」と考えていたというイメージがあります。もちろん、三池で闘うことが社会主義革命につながるというのは、普通に考えれば理解しがたい発想であって、それゆえ、向坂には、起こるわけもない「革命」を夢想する「ドン・キホーテ」であると、極端に言えばそういうイメージがまとわりついていました。そうしたイメージに対する明確な反論が、向坂の身近で活動してこられた方から提示されたという点は、非常に興味深いと思います。実は、私自身が、ややそういう通俗的なイメージにとらわれていた部分もあるがゆえに、その点は私にとってとくに印象的なお話でした。

ただ、これについては、私の個人的な思い出から生じる疑問もあります。先ほど、九大を離れる直前に向坂の「影」にふれる機会があったと申しましたが、それに関連したお話になります。それは1999年に、亡くなる少し前の奥田八二・元福岡県知事から、三池争議の頃の思い出話を聞く機会を得たときのことで、三池争議の頃、彼は九大の助教授で、向坂とともに三池争議支援に取り

組んでいたわけですが、実はこのとき奥田は三池と並行して、同じ福岡県下のもうひとつの産炭地である筑豊にもかなり精力的に入っていたそうです。その頃「黒い羽根」運動という、中小炭鉱の相次ぐ閉山で地域全体として困窮に陥っていた筑豊の炭鉱失業者の救済運動が展開されていたのですが、奥田はその運動にもコミットし、三池争議の現場に入るかわら、筑豊もたびたび訪れていたのです。ところが、奥田はそのことについて向坂に厳しく叱責されたというのです。つまり向坂は、「三池で革命が起ころうとしているときに君は何をしているのだ。筑豊などに入る時間があればこちらに力を集中すべきだ」と奥田を批判したというんです。

私は石河さんが、向坂が三池争議をどう捉えていたかについて間違っただけのことや嘘を言っているというふうに思っているわけではありません。向坂が三池争議を「社会主義革命」と直接結びつけようとしていたわけではない、というのは、おそらく向坂ほどの明晰な頭脳の持ち主であれば、よく考えてみれば当然なわけです。しかし同時にそこには人間としての「揺れ」とでもいうべきものもあったのではないかと。

つまり学者としての目で冷静かつ客観的に情勢を分析したときに、当然、三池争議の現場にあって「ここで社会主義革命が起こりつつある」というような認識が出てくることは普通ありえない。だから、職場闘争にしても、いきすぎに対してはブレーキをかけるべき部分もあるというような冷静な判断が生まれうるわけです。

しかし、現地に入って、そこで労働者と共に闘争の現場に身を置き、闘う労働者の息吹にふれながら彼らを鼓舞するなかで、「今ここでこそ革命が起こりつつある」というような「思い」が醸されるということもありえたのではないかと。これはかなり勝手な読み込みかもしれないのですが、石河さんと奥田という、ともに向坂の傍で「三池」を体験された二人の方の記憶について、どのように整合性をつけるべきかを考えた末に、このような思いに至ったわけですが、石河さんのお考えを伺ってみたいと思います。

最後の一点はお二方^{ふた}にお聞きしてみたいと思います。この三池争議のプロセスを考える上で非常に重要だと思われるのが、企業別組合（企業連）である三鉱連が争議から離脱してなお、事業所レベルの組織たる三池労組の闘いはなおも非常に活発であり、戦闘的であったという事実です。つまり、日本の労働組合組織論、あるいは労働組合運動史が論じられ語られるとき、しばしば「企業別労働組合」という組織形態が、労働組合から戦闘性や対企業自律性を損なう「宿痾」として語られるわけです。そしてそのことは的外れだというわけではないと思います。しかし、「企業別」という組織形態が問題の根源であって、それを克服するのは職種別ないしは産業別の中央集権化された組織であるという命題に固着していると見えてこないものがそこにあるのではないかと。つまり、三池の経験が示唆するのは、企業別組合に対して、労使対抗的な組合運動を貫徹しえたのは、むしろ企業レベルに対して自律的な職場レベルでの組織だった、ということの重要性ではないかと思えるわけです。向坂はその点を非常に鋭くとらえていたということでもあるらしいので、平井さんと石河さんお二方にこの点に関して、何かご感想などあれば伺ってみたいと思います。

総じて非常に印象深い刺激的なご報告で、大いに学ばせていただきました。どうもありがとうございました。（拍手）

（ひょうどう・あつし 専修大学経済学部教授）